



# 誰かがやらなければならないことを 気負わず、楽しく

清瀬市公共刊行物音訳機関 代表  
小川孝子さん



清瀬で生きる女性にインタビュー

## ●音訳の仕事とは

視覚や体に障がいがある方や高齢で読むことが困難な方に、清瀬市が発行する公共刊行物（毎月2回の市報、清瀬市議会だより、教育委員会だより、Ms. スクエア、ちえのわなど）を全文音訳して音訳版CDを利用者さんの手元にお届けする仕事です。現在24名のメンバーで活動し、清瀬市の秘書広報課から委託を受け製作を行なっています。音訳機関が発足して今年で19年目になります。「声のボランティア」が製作していた頃を入れると40年近く活動を続けています。コミュニティプラザひまわりにある音訳室では、パソコンによる録音と編集作業を行うことができ、録音ブースも4つ備えてあります。清瀬市の音訳の歴史が古いことに加え、十分な設備があることは、大いに自慢できるところです。



## ●音訳の仕事についたきっかけ

ご近所の方に誘われ、何気なく「声のボランティア」に参加し、そこで初めて音訳のことを知りました。音訳は朗読と違い、読み手の感情を入れて読むと内容が聞き取りづらくなっています。また、文章だけでなく、写真、図、イラスト全てを音に変える「全文音訳」をするには、文章をよく読み込み、内容を理解することが重要です。そのための下読み作業が手間もかかり、大事な作業になります。

## ●誰かが情報を受け取れるように

現在は2年に一度行われる社会福祉協議会主催「ボランティア養成講座」に参加し、10〜12回程度の講習を受けることで音訳の仕事に携わることができます。私も以前は、東京などでも主催している音訳の勉強会などに積極的に参加していました。やはり文章を読むこと、調べることが好きで続けているんだと思います。



## ●誰もが情報を受け取れるように

音訳の仕事で一番大切に行っていることは「情報の公平性」です。というのも「情報障がい者」という言葉があるくらい視覚に障がいがある人には情報が不足しています。また、情報を判断するのは利用者さんです。情報が与えられなかったり、勝手な判断で削られたりするのとは間違っていると思います。そのため全文音訳を行なっていますし、刊行物の音訳版CDも紙版の発行日と同じ日に利用者さんの手元に届くようにしています。

音訳の仕事は誰かがやらなければならないものです。それは必要としている人がいるからです。見えないことが気の毒だからではありません。できることを音訳の仕事を通じて補っているに過ぎません。当たり前のことです。利用者さんの中には、音訳CDの情報が全てという方もおられます。毎回

## ●仲間と続けることが力に

音訳された情報を楽しみにしてくださっている方や、馴染みの声が聞けると安心するといった声を聞くと、やっぱり嬉しくなります。

音訳の仕事は集中して行わなければならない神経を使う作業もありますが、それを苦に感じたことはありません。作業日も年間スケジュールが組んであり、担当が回ってくるのは月に一回くらいです。もう生活の一部のようになっていきます。だからメンバーのおかげもあり、あまり無理をしないで活動することができています。私も今年で25年目になりますが、長く続けることが大切だと思います。経験を積むとどんどん上手くなりますよ。

本を読むのは好きですし、子どものころの希望の職業は、アナウンサーだった気もします。趣味はボタニカルアート※で、緻密な作業は音訳の仕事と似ているのかもしれませんが、（まとめ 成田）

## ボタニカルアート



小川さんの作品



※物の姿を正確で細密に描く植物図鑑のための絵画

「続けている」ことは、人生において大きな財産になると思います。私も「花てまめ」でフェスタに参加しました。好きなこと、些細なことでもコツコツ。自分の強みに変えていけるように。

